
天使か悪魔か幽霊か

紀織繭璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使か悪魔か幽霊か

【Nコード】

N4594I

【作者名】

紀織繭璃

【あらすじ】

主人公の楨^{まき} 隼^{しゅん}吾^ごは、自称・地元じゃ結構なの知れた問題児。毎朝早朝3時起床、新聞配達をしてから高校へ余裕を持って登校（教師への爽やかな挨拶も忘れない）、授業もサボらずしっかり受けて委員会活動（図書委員）の仕事をしてからまっすぐ家に帰宅。家に帰ったら授業の予習と復習を忘れません。そして明日の用意をしてから9時消灯。

そんな彼は、新聞配達の途中で、事故に遭い、小・中・高無欠席という称号を逃してしまいま…じゃなくて、なんと幽霊が見えるよう

になってしまいます。しかも出逢う幽霊の無念を晴らすことが出来なければ、その幽霊の代わりにあっちの世界へ連れて行かれる、というのです。

なぜか彼にいつも憑いているイケメンの幽霊、フランソワ（純・日本人）と共に、今日も隼吾は悩める幽霊達のため、無念を晴らします！！！！

自称・問題児×イケメン幽霊のハイテンション心霊？コメディーズ。

登場、そしていきなりジ・エンド

「おっはよーございまーす!!」

俺がそこへ到着すると、手に配達前の新聞を沢山抱えたオヤジさんと目をこすっているオカミさんがいた。

「お、今日も一番乗りだな、隼^{しゅん}吾くん」

「いつも有難うね」

「あははっ」

照れながら親父さんから新聞を受け取り、相棒の荷台にしっかりとくりつける。それを確認して、親父さんは目を細めて言った。

「じゃあ、今日も頼むよ、配達」

「任せてください!」

そう言っただけ俺は相棒にまたがり、ベルを「ちりんちりん」と鳴らしてから漕ぎ出した。

俺の朝は早い。毎朝早朝3時に起床。素早くジャージに着替えて近くにある新聞販売店、「ドミニク新聞店」へ向かって俺の相棒、クリスティーナ（ママチャリ）を走らせる。そして、誰よりも早く新聞を配り（営業スマイルと挨拶も忘れずに）、家に帰って朝食をとる。それから俺の通う高校、アバスカル高校の指定制服をきっちり第一ボタンの上まで留めてから、クリスティーナと共に朝の爽やかなこのアリスア町を颯爽と駆ける。そして、授業を決してサボらず受け、放課後は委員会活動、家に帰ったら予習・復習をして、明日の授業の用意etcをしてから9時にはベッドに入る。…なんていう素晴らしい不良ライフ!!!!!! ふはははははは!!!!!!

「ふはははははは…」

そんな俺の華麗なる毎日を脳内でプレイバックしていると、あつという間に配達する家に着いた。

リズム良く、新聞受けにどんどん新聞を入れていく。こうしていると、モヤモヤしていた眠気もどこかへ飛んでいってしまうのだ。

なんていい仕事なんだ、新聞配達^{バイト}って。ありがとう！、新聞配達。
最高だ！、新聞配達。

「ふんふんふん♪」

新聞を全て配り終わって、行き交うご町内の皆さんに爽やかに挨拶をしながら鼻歌を歌って、ドミニク新聞店に戻る。

そして、一番相棒と走っていて気持ちの良い大坂、サカス坂へやってきた。この坂ををノンブレーキで下るのが俺の日課。ここへ来れば新聞店まであと少し。よしっ、スピード上げてくぞおおお……！！十分に助走をつけて、いざ、サカス坂へ……

「うおー！！！！！！！！！！」

シャー……と、クリスティーナは爽快に走り出し、俺の全身にも爽やかな朝の清々しい風が当たり、気分は絶好調。もう自分がクリスティーナと一体になって草原を駆け抜けてるイメージ。盗んだバイクで走り出した人も、こんな感じだったのか？？ああ、なんて気持ちいいんだ！！もっと、このイメージに浸っていたいけど、この坂のすぐ下は崖。ここいらでブレーキをかけないと、取り返しのないことに……

ここで、クリスティーナの異変に気がつく俺。

「……あれ！？」

ガチッ、ガチッ、と相棒のブレーキが変な音をだして、俺は嫌々な予感が脳裏に浮かんた。

『ま、まさか……ブレーキが……』

その刹那。

俺は宙に自分の体が浮かんでいることに気がついた。遥か下には見慣れた俺の生まれた街。ゆっくりと流れていく景色は、これまで俺が生きてきて気がつかなかったことも映し出していた。ああ、俺、死ぬんだ……。そう思いながら見慣れた街を眺めていると、不意に景色が止まり、沈黙が起きる。

「！？」

そして、俺は風を切るように、下へ、下へと猛スピードで落ちて行

天使くんの！なんっちゃって登場人物紹介！（前書き）

…なんか…すみませんねえ…。
まあ、気長に見てください。

天使くんの！なんっちゃって登場人物紹介！

天使「…あのさー、俺、こういう役じゃないんだけどさー。俺、登場人物だし？いい加減にしてくれるかなー、作者」

紀織 「すいません、天使く（目の前をナイフが飛んでいく）」

天使「『くん』じゃねー、『サマ』だ」

紀織「すいません、天使サマ」

天使「で？俺何すんだ？」

紀織「え、じゃ、あの、これから登場人物のフリップ出すんで、（カバンをゴソゴソ）この台本に沿ってキャラ紹介とかしちゃうてくれま（目の前をクナイが飛んでいく）」

天使「『してください』、だろ」

紀織「してください」

天使「（台本を受け取ってパラパラとめくってみる）いいぞ、始め
ても」

紀織「じゃあ、行きますよ…（そういつてカメラに向かって）皆さんこんにちは」

[illegible]

紀織「何ですか、天使サマ」

天使「何、これリハじやなかったの？」

紀織 「え、あ、はい、そうですよ。だってそういったじゃないです
か」

天使「…うつそ」

紀織「え？現実ですけど？」

天使
「
:
」

「……天使サマ？」

覚醒天使「皆たまー!! 始めましてですう! 皆たまのアイドル、天使たんですよお!!!」

紀織「…いきなりどうしたんですか、天使サ（目の前を包丁が飛んでいく）」

覚醒天使「天使たんですよー！！」

紀織「…じゃあ、天使たんを紹介していただきましょう、まずは…こいつ！」

覚醒天使「『槇 隼吾』ですねー！！この子は、…（台本を見て）主人公なのだ！そしていきなり人生が終了しちゃうカワイソウな子なのだ！…たく、主人公持っていていきあがって…」

紀織「…何かボヤキが聞こえましたよ、天使た（目の前を藁人形が飛んでいく）」

覚醒天使「そして、この子は、なななななんと！死んでいな」

紀織「あ、どうやらお時間です。それではまたらくいしゅうバイバイ！！！！！！」

天使「…後でお前説教な」

紀織「わ、私何もしてなぐふはおしよh zもいjhさhくおあ」

『あーもー。五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い』

そういつてイケメン男性は俺を支えていた両腕を耳へ持っていて、
耳を塞ぐ。もちろん、俺は支えられている物を失ったため、ドスン
と下へ落ち…ない。

『あれ?』

ここで俺は今自分のいる場所を知り、息を呑んだ。

『うそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおん!!!!!!!!!!!!!!』

『ちょ、君、さっきから五月蠅いつて、ホントに』

今、俺がいる場所。このイケメン男性が立っている場所。そこは、
…空の上。下には俺の見慣れた町。

『君さあー、ホントに幽霊なの?俺にはそう見えないけどねー』

ボリボリと栗色の髪を掻きながらチラッ、と俺を見ながらボソボソ
とつぶやいた、このイケメンさん。

…ん?ちょっと待て。

『え、今なんて』

『ん?君?』

『その後』

『ホントに』

『その後』

『俺にはそう見えない』

『その一つ前』

『幽霊』

『それだああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああッ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!』

幽霊って、あの「うらめしや〜」とかいうヤツだよね!?それが、
俺ッ!?そんな、馬鹿な…。

『え?何、気がつかなかったの?面白いね、君…』

イケメン君はによという擬態語が似合いそうな笑みを浮かべて俺を見下していた。そして、その笑みのまま俺に言った。

『…何なら、俺と『契約』しない？』

…な、何ですと？契約？そんなの俺の知ったこっちゃない。何が幽霊と『契約』だ。実体にもなっていないのに。こんなの、騙されるに決まっている。そんなことを考えていたら、自然と俺はイケメン詐欺師もどきから後退りしていた。

『疑ってんの？まあ、いいけど。するかしないかは君の自由ってヤツだよ』

フ、イケメンは鼻で笑って『ま、話は最後まで聞こう、な？』と言って俺に近づき、肩をポン、と叩いた。そして、おかしなことを言い出した。

『俺が君を生き返らせる。だから、君が生き返ったらこの世に未練があつて彷徨っている奴らを…』

『…生き返らせて…くれるのか？』

俺はイケメンが全てを言い切る前に口を開いた。1%でも、望みがあるのなら、俺はその望みに人生を賭ける。もし、もう一度皆に会えるのなら、俺は何だってする。…そう決めたから。

『話は最後まで聞けって言ったじゃん、俺。…でもまいっか。…交渉成立だ』

イケメンさんは小さく微笑んで、カツ、と指を鳴らした。…その刹那、俺の体はポウ、と小さな音を立ててどんどん薄くなっていく。

『え！？』

『…2度目の人生だ、もう後は無いよ。大切にいき…』

最後のほうは聞えなかった。でも、男の俺でも見惚れる程の甘い笑顔で俺を見送っているのはしっかりとこの目で見た。

…イケメンってホント、特だよなあ…。

呪いの？復活！！！！

薄暗い室内に、重い空気がいっぱいに広がる。不安と、絶望と、奇跡を望む感情が入り混じり、なんともいえない緊迫して凍りついたこの部屋の空気を一気に吸い込み、そしてゆっくりと吐いた医師が重い口を開く。

「…残念ですが、息子さんは…もう、」

手遅れです。この病院一の腕を持つといわれる医師の言葉を聞き、父親は目を見開き、絶望した。

「……そんな、」

まさか息子が、なぜ息子が、こんな目に遭わなくてはいけないのか。ふつふつとそんな思いが浮き上がり、やがて胸の中を支配する。そして目からは次々に涙がこぼれる。まだ息子には未来がある。まだ息子には遣り残したことがたくさんこの世界に溢れている。まだ息子が見たことの無いものがある。まだ息子と共にやったことの無いことがある。まだ、息子には……。そう思うと、ますます自分が無力になってくる。握り拳をゆっくりと解き、冷たくなった息子の頬にそっと触れた。

「隼吾ッ：隼吾ッ：隼吾ッ：」

母親は、そんなことあるはず無いと思った。

息子のアルバイト先の新聞店から「今すぐ来て」と一言だけ言われ、一方的に切られた電話。自分の脳裏に浮かぶ不吉な事態をそんなことは無い、と打ち消しながら駆けつけると、現場に横たわっている変わり果てた息子の姿を見た。

もし、あの時、自分がもっと早く駆けつけていたら。もし、今日だけ息子がアルバイトを休んでいたら。もし、自分が仕事へと向かう息子を引き止めていたら。もし、息子が…死ななかったら。こんな最悪な日にはならなかっただろう。いつもの平凡で、何にも無い毎日だけど幸せな朝を迎えてただろう。…息子の存在を皮肉にも、

失ってから気がついた。

息子の名前を泣きながら何度も、何度も繰り返す呼ぶ。でも、もうそんな声も、この思いも、愛しい息子にはもう届くことは無い。

「親父！お袋！」

「お兄ちゃんは！？」

勢い良く入ってきたこの兄弟は、この病院では最上階のここ、5階にあるこの部屋まで階段できたのだろう、息を切らして苦しうに顔をしかめた。

そして、変わり果てた兄弟の近くで泣き崩れる両親の姿を見て、全てを悟った。

「…ちくしょ、」

短く吐き捨てた兄は壁に向かって、自らの拳を叩き付けると、壁に背中を預けてへなへなと座り込んだ。そして虚空を見つめ、静かに涙を流した。

「…嘘、よね……？？」

妹は兄に駆け寄り、もう熱を持たない、冷たい肩をつかみ、必死に揺らす。

「…目え開けなさいよ！！バカ兄貴！」

…誰もが、悪い夢を見ているのだと思った。

…これは、リアルすぎる、夢なんだ。

…本当に起きてはいないんだ。

誰もが、奇跡を願っていた。

しかし、…それはもう何も意味を持たないということを悟ってい

…恐ろしいことが起きた。

「……………」

むっくりと起きる、屍。

イケメン幽霊おまけ憑き。

「脈も正常……。こ、これは奇跡（呪い）……。としか言い様がありませんね……」

「あはははは……」

引きつった笑いを見せながら、俺と医師は顔を見合わせた。まさか、この道30年を迎えたこの先生でも、俺みたいに生き返ったヤツは見たことも聞いたことも無いだろう……。俺も無い。

「ホントにご迷惑をおかけして済みませんでした……」

「いやいや、良かったですね……」

父ちゃんと母ちゃんが二人で医師と看護師に頭を下げる。明らかに引きつっている、笑顔。曖昧に笑うしか手段がないのだろう……。だって、一度死んだ人間が生き返るんだもんな、そりゃ複雑だよ。俺だって気味悪りーよ……。まあ、それが俺だけだ。

「じゃあ、これで……」

「あ、はい、お大事に……」

そういつて、俺達は部屋を出た。外には苦笑いをした兄、槇 遼悟（まき りょうご）と明らかに不機嫌な顔で窓の外を眺めている妹、槇 由宇（まき ゆう）が待っていた。

「……よ、良かったな……」

「……まあ……」

兄貴が俺の肩をポン、と叩いて階段の方へ向かって歩いていく。後ろから見る兄貴の背中が、とてつもなく疲れているように見えた。……ごめん、兄貴。俺が死ななかったら……。

「……心配してホント、損した」

後ろから苛立った声が聞えて振り返ると、俺をギロツと睨み付けた由宇が立っていた。……ん？『心配した』……。このツンデレ少女、生まれて初めて兄に心配してくれました……。ッ！！！！これは人類の進化！？なんだか今日はおかしいぞ！？赤飯だ！赤飯もってこいッ

死ね死ね死ね』気迫。一気に一人で受けるのはあまりにも辛いです。ううう…ごめん、皆ごめん…!!

「隼吾」

か細い母ちゃんの声。俺には『…ゆ…ご』位しか聞えなかった。でも、『振り返れ、俺!』という俺の第6感が働き、すぐ後ろの母ちゃんを見た。

「今日は、…学校休みなさい」

…意地でも行きたかったが、『これ以上困らせると…どうなるか分かってるね?』という家族からの重圧からか、「分かった」としか言えなかった。

ああ、終わった…小中高無欠席という記録…。

がちゃん

乱暴に部屋のドアを開けた。そして今まで着ていた血や泥で汚れたジャージを脱ぎ、Tシャツとジーパンに着替えてベッドに横たわり、ちら、と壁時計を見る。…7時56分。普通ならもう登校している時間だ。下からは慌てて食事の用意をする音、シャワーを浴びる音、水洗トイレを流す音など色んな音で溢れかえっている。兄貴は講義に間に合うだろうか。由宇は遅刻だろうか。父ちゃんは電車に間に合うのか。母ちゃんはパートへ行くのだろうか。そんなことを考えながら窓の外を見つめた。

青い空がどこまでも広がっていた。この空に、俺はバカみたいに飛び込んでいったのか。そう思うと本当に自分でなんだろうと思う。

『ホント、君って一体なんだろうね?…?』

いきなり顔を覗き込まれて俺はぎょつとした。…誰だ?誰なんだ?お前は一体なんなんだ!?俺は起き上がると、顔を覗き込んだ人物を見た。

栗色の髪。

兄貴に負けなくらい整った顔。

スラッとした長身。

そして、なぜか見えない…足。

…こいつには見覚えがあった。

「おまッ、あのときの…!？」

そう、あの時。俺が、一度死んだとき。

『君…。命の恩人に向かってお前は無いでしょうが』

俺と契約する代わりに生き返らせてくれたあの…幽霊がそこに立っていて、にししと笑っていた。

偽りのフランス人

『どうだい？二度目の人生は』

俺の命の恩人：幽霊はにと白い歯を見せて笑って見せた。：なん
なんだ、こいつは。恩人に向かってなんてただ、すごく変な幽霊^{ヤツ}。
「どうだい：って言われても：今さっき生き返っただけだし：」

『まあね。ははは』

ははは：ねえ：。俺も良く分からずはははと笑ってみる。：すごく
曖昧。ってか、なんなの、俺達。

『で。覚えてるよね？：契約の件は』

いきなりこのイケメンは厳しい目をして声を潜め言った。契約：あ
あ、なんかあったな：そんな話：。でも、俺は全部聞く前にこいつ
が生き返らせてくれたから、はっきり言って契約って言われてもピ
ンと来ない。

「：全部聞いてない、うん。聞いてない」

『あ、そっか。君、その前に名前は？』

：こいつは人の話を全く受け付けないタイプのようだ。はあ、と溜
息をついて俺は言った。

「：槇隼吾」

『うん、知ってる』

なんじゃそりゃ。：こいつは思ったより曲者だ：。こんな短い会話
でも疲労感が溜まりつつある。

「：はあ：じゃあ、あんたは？」

『フランス人』

「嘘だッ！！！！」

『失礼な。これは俺の親がちゃんとつけてくれた名前だし』

「あんた何人だよ！？」

『フランス人』

…明らかに違う。だってフツーに日本語だし、目は黒いし、誰だって日本人だとは思えないし。フランス人だって言う方がおかしい。…フランス人詐欺？

「じゃあ『こんにちは』は？」

『…は、ハロー？』

…バカか、こいつは。ハローは英語だよ。これくらい、今の日本じや幼稚園児でも知っている。

「嘘だな、フランス人って言うのは」

『…いやいや、マジでフランス人だって！OK？』

「…だからそれ英語」

『…お、俺ッ、ロシアに友達いたし？だからし、自然と英語が身についた…みたいなの？』

声裏返ってますよ、おにーさんッ！ってかロシアの友達で英語が身につくって…。どんだけ万能なの？ロシアの友達。

「…もういい」

『お、折れたな。だから言っただろ？俺はフランス人だ』

…永遠に一人でやってろ、偽・フランス人。

『で？契約のことだったよ…って寝るな！隼吾！』

このフランス人会話で俺はいつもの5・1倍疲れた。俺は改めてベッドに横になり、フランシスに背を向けて、目を閉じた。後ろでギャーギャー騒いでる詐欺師フランシスはもうほっというて、寝よう。どうせ今日は何も出来ないし。そして意識がだんだん遠のいていき…。

契約したらまずお前をぶん殴る

：気がつくと俺は、あたり一面が真っ白く、奥行きも高さも分らないところにちよこんと座っていた。目の前には

「おまおまおまおまおまおまおまおまおまおまおまおまおま」

『おはよう、隼吾くん?？』

フランススがによと笑っていた。

「何でお前がここにいるんだよおっ!!!!!!!!!!!!!!」

『何でって：俺、人の夢の中には入れるんだよねゝゝって言ってなかったっけ?』

そんなこと聞いてないし、作者だって考えてなかったよ。

目の前の幽霊はこちらを面白そうに覗き込んで、甘い笑顔で笑っている。：くそッ、何でこんなに世界は不公平なんだ：。どうして俺だけこんなに惨めな思いをしなくちゃいけないんだ：。

『ふゝん。『何でこんなに惨めな思いをしなくちゃいけないんだ』って言う顔してるね。：何で惨めな思いをしてるの?』

神様、神様。どうかこの幽霊を今すぐ成仏させてください。今すぐ安らかな眠りをプレゼントしてあげてください。

「お前には一生関係ないことだよ」

『一生って言うてももう俺、死んでるんだからね?』

むかつく。なんだこいつ。

わなわなと湧き上がる怒りを気にせず、偽りのフランス人は、本題に入った。

『んじゃ、契約内容について話すよ?』

「契約?」

『俺が生き返らせてあげたじゃん?その瞬間から契約が結ばれたんだよ』

「：」

『俺と君との契約は、今『この世』にいる幽霊を『あの世』に送る

こと。早く言えばそんなところだよ』

俺は、はつきりいって、『この世』にいる幽霊からそんな事いわれるだなんて思ってもいなかった。目の前にいます。ここに『この世』にいる幽霊がいますよ。

『で、何でもこういうことになったかというとな、俺が死ぬ前にちょっといい事をしてたから、こういう特権がついたんだよね。まあ、一回だけだけど、神様が何でも言う事を聞いてくれるんだよ…って聞いている？…聞いて無くていいや。で、君を生き返してあげるかわりに、『この世』を彷徨ってる幽霊達の未練を解いて、『あの世』に送り返すって言う仕事をしてくれて頼まれたんだよ。『この世』にいる幽霊は…まあ、俺を含めてだけど…みんな未練があるんだよ、だからそれを解けば、送り返すことが出来るんだよね』

俺はこの長すぎる説明を右から左へ受け流していた。…もう『あの世』とか『この世』とか『神様』とかよく分からない。しかもなんか仕事を押し付けられている…。未練を解く？…未練…。

「じゃあ、お前の未練は何なんだよ」

『俺の未練は金髪の巨乳美女軍団にいちやい』

「あ—————」

「—————そうしたことだと思った」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594i/>

天使か悪魔か幽霊か

2010年10月9日06時20分発行